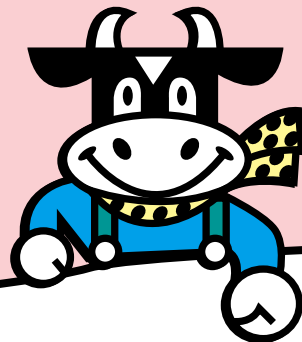




ワンポイント・アドバイス



牛の小型ピロプラズマ病について

牛の小型ピロプラズマ病はダニが媒介する感染症で、主に放牧牛に貧血が起こります。道東地区の一部牧野でも多発例が報告されています。ダニは5〜6月が活動のピークですが、涼しくなる9〜10月に再び活発になるため、秋にも注意が必要です。

【感染経路】

ダニのもつ小型ピロプラズマ原虫(非常に小さく顕微鏡でなければ見えない)が、ダニの吸血時に唾液と共に牛の体内に侵入し、血液中の赤血球に寄生することで貧血が起こります(図1)。



図1 牛赤血球内に寄生している小型ピロプラズマ原虫

【症状】

主な症状は貧血、発熱、黄疸、(流産)です。貧血が続くと、発育停滞、繁殖障害、乳生産量の減少が起こり、重症例では死亡することもあり、大きな経済損失をもたらします。牛は運動を嫌い、貧血で粘膜、乳房や皮膚が白くなり、急激な貧血では黄疸のため黄色い場合もあります(図2)。放牧中の元気のない牛を早く見つけて獣医師の診療を受けてください。



図2 感染牛の膈粘膜の重度の貧血と黄疸

【道東のダニ】

道東に生息する北方型のダニの中にも小型ピロプラズマを保有するものが確認されています。北方型のダニの特徴は長い口先です(図3)。時計回りに回転しながら噛みついてセメント成分を出して固まります。



図3

ヒトやペットが噛まれた時も無理に引き抜いてはいけません。一部が残り化膿することがあります。皮膚科へ受診することをお勧めします。

【診断・治療】

診断には血液検査、顕微鏡観察により赤

血球に寄生する原虫を確認します。治療薬(ジアミン製剤)はありますが、用量が多く痛みを伴うことがあります。輸血、補液など貧血の対症療法、強肝剤投与で症状を軽減させることはできません。

【予防が重要】

◆殺虫剤を塗布する

ピレスロイド系殺虫剤やイベルメクチン製剤または類似の薬剤の定期的な牛体塗布が有効です。耳標型の殺虫剤もあります。数年継続して行うことで牧野の清浄化が可能です。

◆牧柵周辺の下草刈

草刈を行った牧野ではダニの数が減少します。牛がダニに噛まれる機会を減らすことができます。

◆エゾシカ対策

鹿は耳などに大量のダニを付着させていることがあり、牧柵周辺にダニを落とします。鹿柵設置によりマダニ供給源となる鹿の侵入を防ぎましょう。

【参考図書・写真転載】

小岩政照、澤向豊ほか(2007)『テレビ・ドクター3』デーリーマン社